

八戸三社大祭における 場の関わりに関する語りと場のデザイン

富士 薫¹・羽藤 英二²

¹非会員 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻
(〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学工学部14号館)
E-mail:fukushi @ud.t.u-tokyo.ac.jp

²正会員 准教授 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻
(〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学工学部14号館)
E-mail:hato@bin.t.u-tokyo.ac.jp

本研究では、青森県八戸市における八戸三社大祭の3つの神社を結ぶ山車の経路に着目した上で、祭りの歴史を下敷きに、各町内で組織される「山車組」に長年参加を続けている人々へのインタビューを行った。地域コミュニティと山車組との関わりや祭りへの関与の仕方の変化について得られた発話データを用いて、都市における場の要素を類型化し、場のデザインに結びつける考察を行った。

Key Words : *design of place, narrative, festival, Hachinohe city*

1. はじめに

(1) 研究の目的

人は生活の中で様々な「場」を経験する。ここでいう「場」とは、空間、時間、そこで起こっている物事を共有し関わり合う人々の集まりである。意図的に人々が集まる場だけでなく、よく利用する公園やバス停、なじみの店などで交流の場が自然発生的に出来ることもあるだろう。こうした場で生まれる交流は、地方都市の過疎化や高齢化、独居者の増加などが進む社会において、人々の拠り所として重要である。

都市における場をデザインするにあたり、その土地の場のあり方や空間要素をとらえる上で人々のオーラルヒストリーに着目することが有効であると考えられるが、語りを空間と結びつけ計画や設計に反映する手法については未だ明らかになっていない。本研究は、地域の人々を結ぶ場において人々の交流や集散がいかんして起こっているのかを場に関わる人々の語りからとらえ、都市における場のデザインへと発展させることを目的とする。

(2) 調査・提案対象

本研究では青森県八戸市を対象とし、地域における特徴的な場を形成しているものとして「八戸三社大祭（以下「三社大祭」）」に注目し、祭りに参加する山車組と

いう組織の場の要素を抽出した。これを日常と祭りにおける空間の使われ方と重ね合わせ、祭りの舞台である八戸市中心街における場のデザインについて考察した。

(3) 既往研究

都市における場に関する研究として、阪神大震災の被災地における地蔵祭祀を取り上げ、地元住民への聞き取り調査をもとに祭祀の場の維持とそれを担う住民の記憶の関係を考察した相澤の研究¹⁾などがある。祭祀の意味付けや参加形態、地域の空間的变化といった観点から考察がなされているが、空間要素や人々の関わり方の生まれ方などといったデザイン言語の抽出や場のあり方についての提案はなされていない。

2. 研究の手法

(1) 山車組という場への注目

後述のように、三社大祭には市内の各町や企業が組織する山車組が参加している。祭り独特の空間利用や地域住民が山車組に関わる過程や祭りへの愛着の表れ方などから、人々にとっての場の意味付けや場を存続させる動機、それらがどのような要素によって生まれるのかを明らかにする。

(2) インタビュー調査

山車組の場について分析するにあたり、三社大祭に幼少時から参加を続け、今も山車組との関わりが続いている地元の方々にインタビューを行った。祭りを見物するだけでなく実際に長年山車組の活動に携わってきた方々の言葉からは、場における人々の集散に関わる特徴的な要素を抽出できると考えたためである。

インタビューにあたっては質問項目をあらかじめ詳細に決めるのではなく自由に山車組での体験を想起していただき、後から場の要素を抽出・分類する手法をとった。これに加え、場のデザイン提案に向けて文献²⁾³⁾⁴⁾による三社大祭の歴史の調査、八戸市中心街の空間利用の観察調査や街頭インタビュー調査を行った。

3. 八戸三社大祭

(1) 概要

毎年7/31～8/4にかけ行われ、約290年の歴史を持つ山車祭りである(図-1)。八戸市内にあるおがみ神社・新羅神社・神明宮の三社合同の神事で、神輿行列に加えて氏子である市内の町内会や企業が運営する山車組が参加し(2011年は27組の山車組が参加)、山車を引く引き子や太鼓、お囃子、虎舞などの民俗芸能の行列で中心街を練り歩く(図-2)。山車は民話や歌舞伎などを題材としたものが多く、山車の出来を競う審査もあるため毎年各山車組で趣向を凝らして制作される。平成16年に「八戸三社大祭の山車行事」として重要無形民俗文化財に指定された。

(2) 歴史

享保6(1721)年におがみ神社で豊作加護のために氏子たちが祭礼を行ったのが起源であり、当初は神輿行列で町内を練り歩き、新羅神社へ渡御していた。その後八戸藩の有力商人が買入れた人形を載せて担いだ屋台や虎舞など町民で編成した行列が参加するようになり、まちの安泰や豊作を祈願する大規模祭礼として発展する。のちに新羅神社と神明宮の行列が加わって三社の祭りとなり、毎年同じ人形を屋台に載せる形式から新しく作った山車を運行する形へと変化し、現在の三社大祭の原型となった。

(3) 山車組と屯所・山車小屋

先述のように元来おがみ神社の氏子の祭りだったが、町民で行列を編成するようになってからは各町内の消防

団などが運営の中心になることが多かった。若い人手を集めやすく、町内への連絡の伝達などもしやすかったためと言われる。現在は各町や企業が山車組を運営しているが、今も町内会が直接関与せず有志が運営している山車組もある。

古くから山車組の活動の重要な拠点となっていたのが消防団の屯所である。今日のように公民館などが設置される以前は、屯所は消防活動のためだけでなく、町内の寄り合いが日常的に開かれ地域のコミュニティの中心となっていた。この近くに山車制作が行われる山車小屋が置かれ、大きな作業は山車小屋で、人形や小物などの縫い物・お囃子の練習やそれに伴う炊き出しなどは屯所で行われた。

しかし、中心街に大型商店が登場した頃から若い消防団員も減り、平成に入ると屯所近くに山車小屋を構えていた山車組が相次いで広い空地を求めて町外に移転した。特に山車組を有する町が集中している中心街周辺の空き地はアパートや駐車場の適地であり、空き地を借りられなくなったことや騒音などの苦情が増えたことが主な原因である。また、町内の住民が郊外に転出したことで山車組の構成員も足りなくなり、現在は他の町内に住む人々が知り合いのいる山車組や賞の常連となっている山車組に参加する例も見られる。市外からの観光客が引き子として参加できる制度もできた。

それでも現在、屯所近くに山車小屋を構え屯所と連携して活動するという古くからのあり方が残る町もわずかながら存在する。また、山車小屋は町外に移転してもそのような屯所の使われ方は続いているという町もある。縫い物や炊き出しは町内の婦人方が担当することが多く、山車小屋が町内から離れても屯所はこのように山車組のサポートをする人々の活動の拠点となっている。



図-1 八戸三社大祭の様子

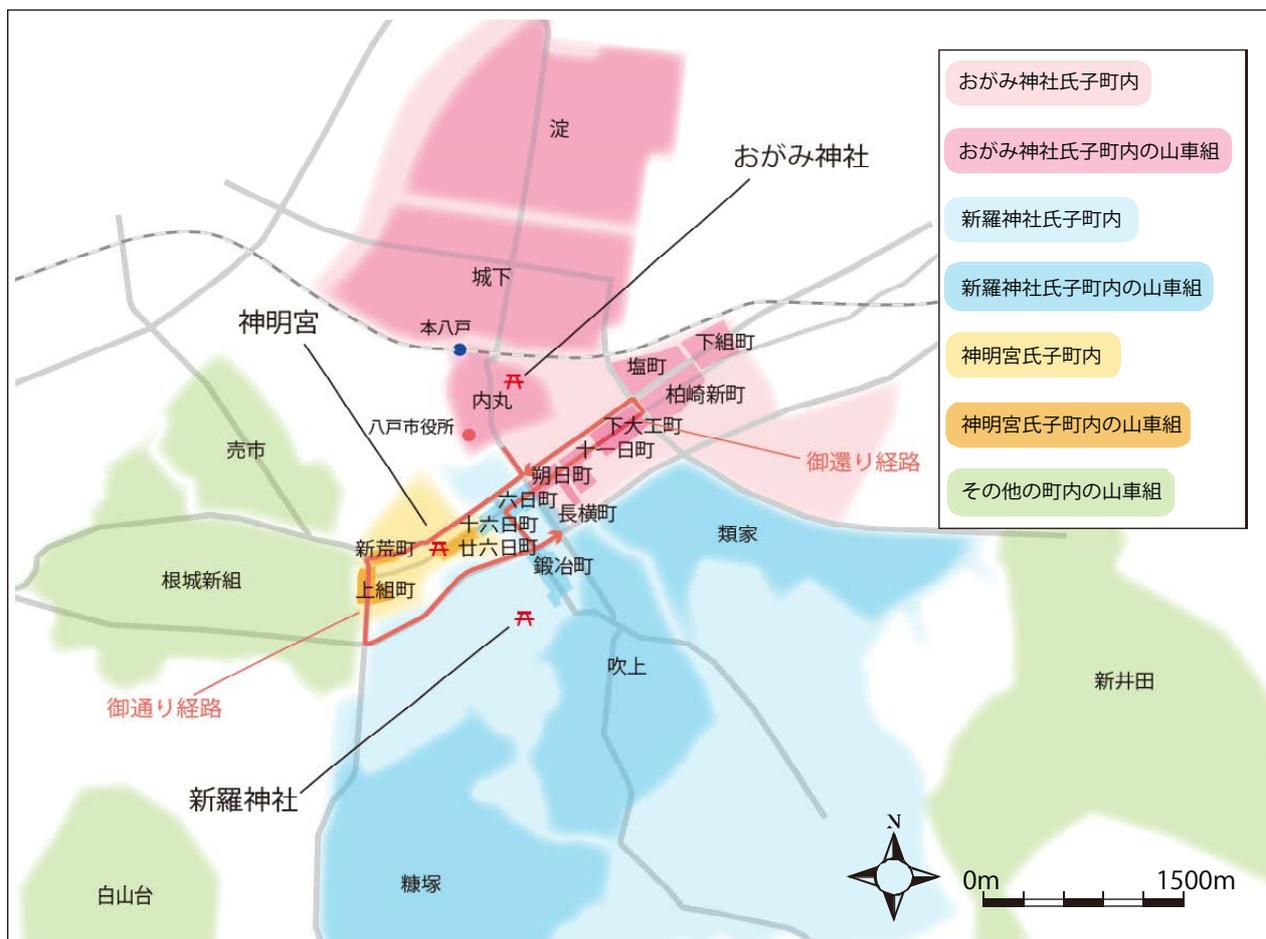


図-2 三社の氏子領域と山車行列の運行経路

4. 祭りの語り

山車組の場に関する語りとして、2011年12月26日から12月27日にかけて、山車組にさまざまな形で関わってきた八戸市内在住の40代～60代の男女8名にインタビュー調査を行った。山車組に参加し始めてから現在までの自身の体験や周囲の人々との関わり、地域の変化などについて伺った。

三社大祭の歴史や空間の使われ方、地域と祭りの関係を下敷きに、山車組に関わる方々の語りをもとに、山車組という場における人々の集散や交流の発生、場の継続に結びつく要素を分析する。特に複数の話者に共通する要素や、個々人の場への関わり方の質・変化に着目した。以下では特に詳細なエピソードが得られた4人の語りについて、場の要素が表れている発話データを抽出・分類し(表-1)、他の話者の語りと合わせて整理する。

(1) 空間、プログラム

山車小屋が町内あるいはその近くにあった頃は、地

域の人々の日常的な寄り合い所となっていた屯所や子供たちの遊び場である空き地といった、生活の中で人々が日常的に利用する空間と、山車作りやお囃子練習などの祭りの準備が行われる空間が重なり合っていた。山車組の活動の場が身近にあることで遊びや近所付き合いの延長のような形で、自然に興味を惹かれ巻き込まれるように山車組に町内の人々が集まっていた。

子供の頃に山車小屋の近くで遊びながら山車が出来上がっていくのを見たり、山車作りを手伝ったりしていたなど、遊びの一部のような楽しみの感情を持って祭りの場に関わっていたことや、身近に見ていた山車作りやお囃子に強く憧れていたという記憶が、大人になってからも祭りへの愛着の根本となっている。山車小屋を取り巻く空間での活動を通じて町内の顔見知り同士が祭りに協力したり、その場で人々が知り合っていくことで、転居などで出身町内を離れても「顔見知りがたくさんいる自分の町内でまた祭りに参加したい」という思いから、祭りのときには出身町内に戻ってくるという人々の集散が発生している。

表-1a 発話データの抽出・分類

	case1(朔日町, 50代女性)	case2(吹上, 50代男性)	case3(十一日町, 50代男性)	case4(売市, 60代男性)
空間	お祭りに出る子供の親たちがおにぎりにごったりお弁当を作ったりするところを「かたや」っていうのね。駐車場みたいなとこだったり、テント張って。	昔は町内に山車小屋があったので、学校の帰りとかに山車小屋の近くを通るんですよ。昔はもう子供はそうやって山車小屋とか身近なところで、作るのも見れたしお囃子の練習も見れたもんで、やっぱりお祭りに憧れているのがありましたね。	十一日町の真ん中に屯所があるんだよ、そこをお囃子の練習とかの起点にしてる。昔は町内の人はみんな消防団さ入って、酒飲んだりトランプやったりしてるの。火が出たって言えばみんなで一致団結して消しに行く。昔は遊びがそんなになかったから、屯所に集まって飲んだりしてたんでないの、	小学校のころは(大人たちが山車をつくっているところで)ほら紙巻けついでに貼ったりして、3時になればキャンディーもらったり、飴もらったりするのが楽しみだったけども。
体験	かたやとか山車小屋に自然に子供が集まって、お祭りが待ちきれなくて、自分たちで太鼓とか出して叩いてたの。夏休みとかになると山車も作る手伝うわけよ。	どの町内も、屯所と山車小屋で連携してる訳ですよ。屯所でも人形作ったり、お囃子練習したり。		
参加の仕方	もう知らないうちに出てるの、親が連れて出るから。それでずーっと出て。父親がだっこして。 やっぱり女の子はね、中学校に行けばさ、部活とかそういうのもいろいろあって、あと恥ずかしいのもあるでしょ、だから一旦やめる、出なくなるんだよね、見るだけになっちゃって。で結婚して子供ができれば、子供を連れて歩くのを口実にまた出て、だんだん年取ってくるとね、裏方のほうに回って、おにぎりとかお弁当作って、親戚の子供とかお祭りに出させたり。	もうずっと小さい頃から吹上に住んで、高校生ぐらいまでやってましたけども、大学に行ったもんで、そこからお祭りに参加できないブランクがずっと続いたんですね。卒業してお祭りやりたいって思いながら地元就職したんだけど、仕事の関係もあってやれなくて、転職したタイミングでまた戻ったというような感じなんです。戻ったときは作る方から始めて、今度は運営の方、お祭りの中での役職も上がったっていうのもあるんですかね。	子供の頃から親父に連れられてかだつた。だからお祭りにかだる*ことが当たり前だと思ってた。そのうちに今度、親父が大工だったから作るのを見て、作ってみたいなあと思って。高校3年の時に絵描くのを手伝って、高校出て就職して、作るようになった。27のときに親方の役をとったの、制作技術もアップさせながら、人間関係をつなぎながら、スタッフをそろえて外堀を固めて、5年前に親方を譲った。だんだんに下の若いのに譲ってかないと。今は会長職になった。山車絵をいつも描いて、人形作ったり色付けたり。(※かだる:祭りに出る)	山車組が発足したときから参加して、小学校のうちは小太鼓、中学校からは大太鼓を叩いて。でも中学校高校ぐらいになると祭り行くより別なことやってる方が面白くなったりして行かなくなって。私の父親が、私が26のときに亡くなって、祭り組の若い人方が悔みに来てくれて、それからちょっと山車作り顔出したり。何年かやって、次の制作委員長が私にまわってきたわけですよ。隣の組に負けたくねえと思って、とにかく毎年一人ずつ仲間増やそうって声かけて、よその組から台車借りてきて参考にして。それから、制作から親方になったんです。
変化(長期)	ちっちゃい町内だからね、今はもうほとんど人が居なくなって、あちこちから呼ぶっていうか、きてもらう。(山車小屋の用地として)前借りしてた駐車場はもうだめついでにわかれて、去年まで山車置いてたところには小学校が建ったからまた遠くに移った。 私が子供のころは、ほんとに町内の人だけでやってたのね、いまはもうほとんど人が出てしまっ、駐車場になつたりしてるからね。もうみんな年になって子供いないから、引っ張る人がなくて、	作る人ももちろん協賛してくれる方も町内の方だけではないんですけど、スタッフは町内が7割8割。今は山車小屋がみんな町内を追い出されて、場所もないしね、空き地もないし、あっても狭くてまわりはみんな住宅で、苦情が出たり、山車小屋が身近にない時代なんです。いまはもうちらも中居林のほうに山車小屋を置かざるをえないし、	でも今ほんとに子供大変なんだよ、町内さいねえ。保育園さ行って、年長組を借りて教育の一環としてやんねえかと。それが二十何年続いている。太鼓たたきがいねえから、よその町内から借りてる。(子供たちは)やっぱり、まちを歩きたいわけ。だから喜んでかだる。 これから大変なのは、山車小屋の確保だよ。	地元の人だけでということではできませんので、気持ちがあって賛同してくれる方なら、どこの方でも一緒にやりますよと、今は山車制作やそれ以外でも若い人は特に、半分か3分の1ぐらいしか地元の人はいないですね。最近一番難しかったのは山車小屋の用地、道具の保管場所の確保、これが少なくとも私らがやらなければならぬことですよ。なるべく私らも町内会のお手伝いしたり、町内会やいろんなものと祭り組と、お互いバックアップしながらやらないとなかなか難しいし、
変化(1年)		祭りの準備期間はもう5月の初めぐらいから。もっと近くなって回覧板でお知らせしたり、練習はいつから始めますよって学校に案内持っていったり、それからどんどんお囃子の練習も始めて町内にお囃子が聴こえるようになって、いよいよだなあというふうに、町内の雰囲気も変わってきます。	その年の祭りが終わってすぐ、来年は何にしようかって考える。歌舞伎見に行ってみたり、資料をそろえたりして考えて、下絵書いて色つけて皆に見せて、5月の中旬から人が集まって(山車作りが)スタート。	

表-1b 発話データの抽出・分類

	case1(朔日町, 50代女性)	case2(吹上, 50代男性)	case3(十一日町, 50代男性)	case4(売市, 60代男性)
思い 動機	<p>(子供の頃、山車作りを見ているときに)気持ちがわくわくするんだよね。あーお祭り始まるなあって、楽しみなわけ。</p> <p>朔日町に住んでいなくても、朔日町のお祭りに出たい。だって、朔日町出身だから。出る場所は朔日町。そこに行けば知っている人もいるから。毎年一緒に出てる人と出たい。他の所が出る人はまずいないと思う。みんな戻ってくる。</p>	<p>お囃子好きだとか子供の頃にお祭りに憧れたってというのが今も続いていて、だからもうずっとやめれないで。お囃子が聴こえればざわざわするっていうか、本番でお囃子やったり太鼓たたいたり、そういうのが染み付いてるからもう、とにかく大好きという感じで。賞をもらえばやっぱりまたとりたいたいなあとということで続けられるというのがありますね。特に好きな場面は、山車を作って本番に向かって準備して、できたときがやっぱり、好きというかほんととするっていうか、やったあという感じがしますね。</p>	<p>前夜祭に持ってって、山車がばーっと開いた時が一番好き。今年もやったなって。あれを見たくて毎年つくってる。感動っていうかな。うちはこんなにつくった、他はどうだ、っていうのを見たときが一番好き。だから自分の時間も家族との時間も惜しんで作ってる。でも子供も結局お祭り好きになるから。俺が年取ったら子供んどもが作っていくっていう、輪廻というか、そういうのがあるのかなと思ってる。参加を続けたのは、まあ好きだからだべな。だからずっとお祭りさ携わっていききたいな。おじいさんになっても紙貼ったりはできるし。</p>	<p>どこでも原則的には、地域の子供たちを楽しませようということが一番の理由づけになっていると思うんですけどね、結局何のために続けてるのかというと、あのおじちゃんたちがやってくるときにお祭りなくなると言われたくないっていう気持ちがあるんですけどね、自分がやってくるときになくなったというのは誰でも避けたいんですけども、あと2年か3年やればいいっていうことではないし、次の代に伝えてつながっていきなきゃない。</p>
交流 集散	<p>幼稚園とか小学校低学年ぐらいになるとみんなね、勝手にかたやとか山車小屋に遊びに行くから、そこで顔なじみになって友達ができるわけ。</p> <p>みんなお祭り好きだからね、集まってくるの。みんなもう朔日町を離れてるんだけども。もともとは住んでいた人。</p>	<p>自分の町内に山車組がある人も来るんですけど、やっぱり町内にないっていう人は、お祭りやりたい人は来ますね。知り合いを通じてっていうのもあるんですけど、やっぱり吹上の山車組がいってっていう人も。スケールの大きさっていうのもあると思うんですけど。賞をとって5連覇が始まってから参加者が増えてるんですよ。</p> <p>うちらは(町内の)エリアも広いですから、いまは吹上だけじゃなくて隣の中居林の町内も一緒について、この広さに助けられてますよ。</p>	<p>スタッフを集めるのは大変。町内にいないんだ、50世帯しかないんだもの。長男だけ残ってあとみんななくなるの。だから友達とかを集めるしかなかった。それでやっぱり最低20人。チームをつかって固めて、賞をとって、次の世代に渡して若いのにはもっと友達集めなさいって集めさせて。友達や友達とか、中には十一日町の山車を見てここに入りたいてっていう人もいた。</p>	<p>町内会が組織されてない時期にも、地域の防災だとか親睦だとかに祭りを活用したんだと思うんですけどね。昭和のころなんかは、毎日お酒が飲める時代ではなかったのですね。お祭りってとにかく食べ物や飲み物にありつけるっていうのがあるんですよ。だから飲むときになるとどっから来たんだべってぐらいの人が集まるんですよ。そうすることで輪っけていきますかね、地域の話をしたり、そういうのも楽しみだし、</p> <p>子供がどうしてもお祭りに参加したいけど自分のところには山車組がないとか。実家がこっちで自分が子供のときに売市で出ていたから子供にも参加させたいということで来られることはあります。</p>

(2) 参加の仕方

幼少時は親に連れられて引き子として参加し、そのうちに大人たちの山車作りを手伝いながらお囃子の練習をするようになり、大人になると子供たちのサポートや山車制作から徐々に山車組の運営へ、というようにライフステージや山車組への関わりの長さに応じて山車組の活動への参加の仕方や役割に段階的な変化が生じている。

子供が年長者の姿を見て憧れたり、自分の役割にやりがいや充実感を感じたりすることが、毎年の祭りを楽しみに思ったり参加を継続したりすることにつなが

っている。また、幼少時から親に連れられて参加していた人が同じように自分の子供を連れて山車組に戻って来たり、近所の子供のサポートをしたりするなど、自身の幼少時の体験や記憶を子供たちに引き継ぐというようなことも起こっている。

(3) 場の変化

山車組が本格的に活動するのは毎年概ね5月から7月までである。徐々に山車組に人が集まり活動が本格化していく中で、山車が出来上がっていく様子やお囃子の音など祭り独特の風景の変化が地域の人々の中で

共有され、「今年も祭りがやってくる」と祭りを思い出させる。

日常の中に祭り独特の非日常の雰囲気が1年の中で周期性を持って徐々に起こっていくことで地域の人々の気持ちは高揚し、愛着を持った祭りの姿が再生されるとともに、普段は居住地が離ればばらになっている人も集まってきたり新しい仲間が加わるなど、山車組での人々の関わりも再生・更新される。

5. 場のデザインに向けての考察

(1) 語りから抽出された要素と問題点

語りからは、祭りの歴史や地域の空間構成だけでなく、それらによって個々人の場への関わり方や人々の交流の生まれ方、場を存続させる人々の記憶がどのようなものになっているのかを知ることができた。山車組という場に人々が集い関わりを持つということにおいて、以下のようなことが言える(図-3a, 3b, 3c)。

1. 溜まり場や遊び場など、人々が日常的に、自由に集まり多様な活動を展開できる場と、山車小屋を核とした非日常的な活動の展開されている場が近接し重なり合っていることが山車組という場への関わりへのきっかけとなり、祭りに親しむ気持ちを醸成している。
2. ライフステージに応じた役割や関わり方がある中で、憧れの気持ちや記憶の継承を伴う役割の変化が、個人にとっての参加の継続だけでなく山車組という場そのものの継承にも繋がっている。
3. 祭りのシーズンという特定の時期の訪れが人々を祭りの場へと引き付け、場の重なりにより生まれていた顔見知りの関係にある人々や、空間的に離れてしまった人々も再び集う。祭りに向けて移り変わる光景は毎年繰り返されることで人々の心に

染み付き、祭りの訪れを人々に知らせる役割を果たしている。

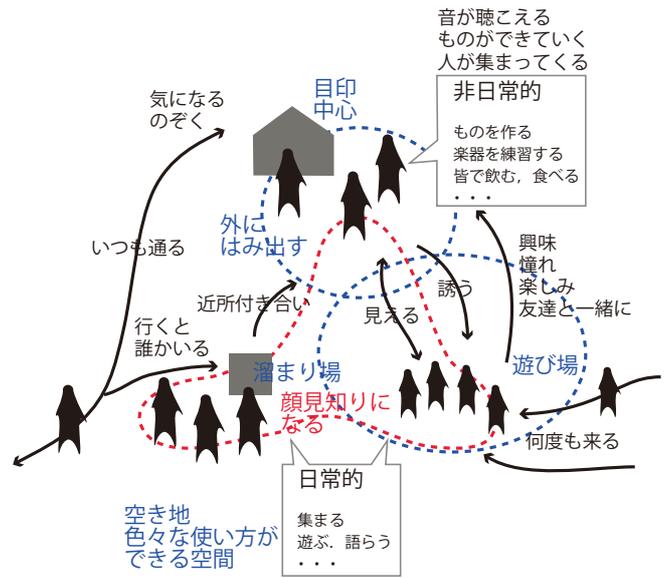


図-3a 語りを基にした場の重なりと空間的要素の抽出

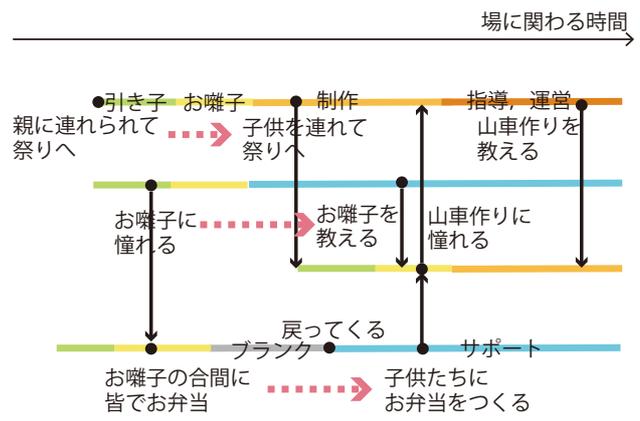


図-3b 語りを基にした場における役割の変化の把握

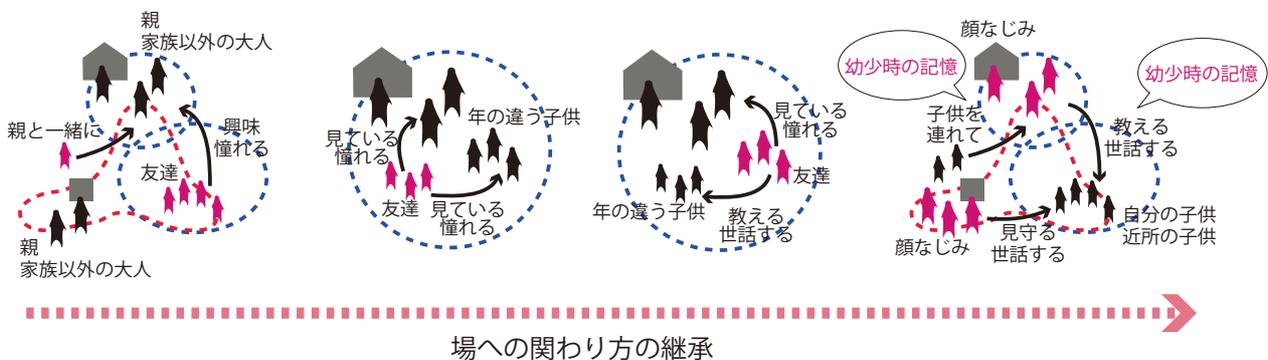


図-3c 語りを基にした場への関わり方の継承の分析結果

これをもとに、以下のような場のデザイン言語を抽出した。

1. 多様な活動の場の重なり
 - ・ 不特定多数の人々が立ち寄れる場所
 - ・ 人々が行き来する中での目印となる場所
 - ・ 自由に活動できる空間
 - ・ 互いの活動の様子が見える、聴こえる
2. 場への関与の仕方の変化と継承
 - ・ ライフステージに応じた多様なプログラム
 - ・ 世代の違う人々が居合わせる
3. 周期性と場の変化の共有
 - ・ 場の様子に変化する
 - ・ 周期的に人々が集まる
 - ・ 日常と非日常の混在

しかし、先述のように近年特に中心街周辺の町内の山車組においては、山車制作の場・お囃子の練習などの活動の場・山車組の参加者たちの生活の場というかつては重なり合っていた場が離れ、上記のような要素は弱まりつつあると言える（図4）。

(2) 八戸市中心街の現状

三社大祭の舞台であり、中心となる3つの神社と氏子町内の多くが分布する八戸市中心街は、古くから商業の中心地として繁栄し、市民が「まち」と呼んで親んできた場所である。家族で出かける場所、学生や高齢者が立ち寄る場所といったように人々にとっての中心街の意味合いはライフステージによって変化し、それが世代間で受け継がれてきた。この点は、山車組における場のあり方と類似している。

しかし、商業化により居住者が大きく減少だけでなく、大型商業施設が相次いで中心街から撤退し郊外に新たな大型商業施設が開店したことで商業の中心としての求心性さえも失われつつあり、現在は空き店舗が目立ち、祭りやイベントのときだけ極端に人が集まり賑わっている状態である。

山車行列の経路でもあるメインストリートはバス通りとなっており、主要な路線の終点となるバス停も集中していることから自動車の交通量が多い。中心街までの交通手段も自家用車やバスが圧倒的に多く、メインストリート周辺の歩行者の行動経路と自動車動線を重ねると、自動車により歩行者交通が分断されていることが分かる。商業の衰退も相まって、人々の動きは一部の大型施設のみに集中しワンパターン化している。このような現状においては、中心街から人々が離れていくだけでなく、人々の活動の場や行動経路の中での動線・視線の交わりは発生しにくく、交流の場が生まれ発展していくことは難しい。

(3) 提案の方針

以上のことから八戸市中心街は、語りによって抽出された場における重要な要素と問題点との両方を併せ持った状態であると言える。そこで、地域の空間と深く結びついた古くからの山車組のあり方を八戸市中心街で再生させ、この場所を行き交う人々の日常と重ね合わせることで新たな場のデザインができないかと考えた。

まず、多様な活動が重なり合う場の核として山車小屋を用いる。さらに「他者と何気なく居合わせている」「他者の様子を見て興味を惹かれる」といった緩やかで温かみのある人々の関わりを生むために、神社・山車の経路といった祭りの空間要素と中心街での人々の日常的な行動経路との関係に着目した空間改変を行う。山車組での人々の役割や関わり方が世代間で巡り継承されていたように、中心街において場の重なりの中でそれぞれの世代の多様な過ごし方を連鎖させることで、八戸で暮らす人々の「帰る場所」となるようなまちの場のデザインを考える。

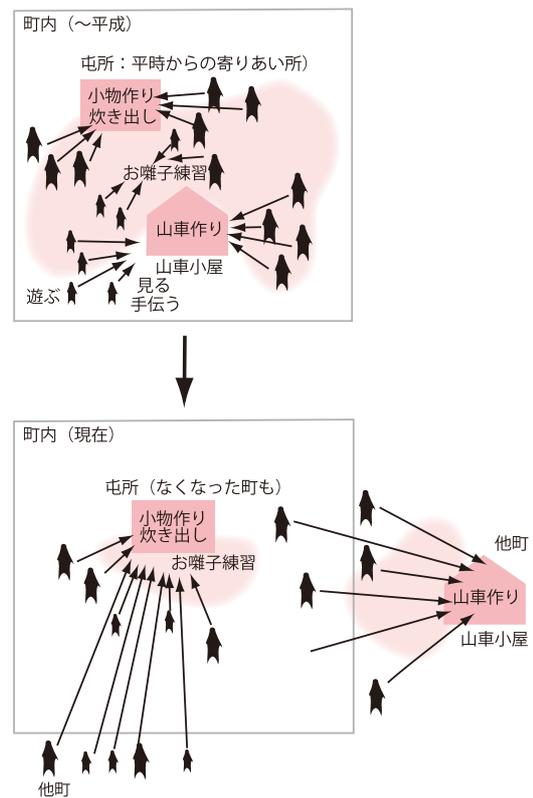


図4 地域の空間構造と山車組の場の変化

6. 八戸市中心街における場のデザイン提案

現状の問題点を踏まえ、語りをもとにした八戸市中心街（以下「まち」）における場のデザインについて提案する。まちでの人々の行動や空間の使われ方から

語りによって得られた場の要素に通じるものを拾い上げ、空間的な問題を解決し新たなプログラムを付加することで、地域に根付いた場の意味や受け継がれ方を再生した。具体的な提案内容を以下に示す。

(1) まちの中心としての山車小屋

山車小屋をまちのメインストリート沿いに設置し、周辺に広場やバスの待合所、図書館など人々が日常的に利用できる空間を整備する。山車小屋の周りで多様な活動の場が重なることで、人々が互いの様子や祭りに自然と興味を持ち交流が生まれる。親子連れ、学生、高齢者などさまざまな属性の人々がそれぞれの過ごし方を選ぶことができる空間にすることで、祭りへの関わり方が世代間で継承されてきたように、まちでの過ごし方・まちという場が継承されていくという設計思想を考えた(図-5)。

こうした場のデザインは、前述した語りをもとに抽出したデザイン言語を下敷きにしたものであり、複数人の祭りという場における立体的な場の継承と発展的な場の連鎖を意図したものである。語りの内面化は設計者の意識下で起こるものではあるが、こうしたデザイン言語を整理することで、設計の展開において住民との対話がより円滑に行える可能性もあることから、語りをデザイン言語化し共有していくことの意義は大きいと考える。

(2) モビリティデザイン

核となる山車小屋の周りを人々が緩やかに行き交い思い思いに過ごせる環境を作るために、周辺の自動車動線を整理する。メインストリートをトランジットモール化するとともに、祭りの経路と三社の方向を下敷きに、市内の各方面からの動線が中心街に入る玄関口となる箇所のバス停や駐車場をリデザインし、まちの駅として整備する。具体的にはバス動線や車動線が歩行者と入り交じる原因となっている駐車場の配置やバス停の配置などを再構成し、広場や待合所などと合わせて整備する。

次に歩行空間のデザインでは、自動車動線の整理によって歩行者の自由な行き来が可能になったメインストリートにおいて、歩道を見下ろすデッキや店舗から張り出すテラス、高低差のある広場など、まちで過ごす人々の視線や動線が多様に交わる空間操作を施す。場の重なりや場への関わりのきっかけをちりばめることで、歩くほどに他者の姿や起こっているものごとを目を惹かれ、次々とまちでの過ごし方が連鎖していく歩行空間となることを考えた。(図-6a, 6b)

こうした構成は、語りにおいて抽出された祭りへの参加者の場の風景をもとに、その風景が生まれる動線

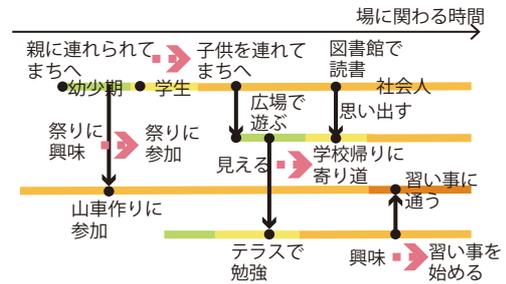
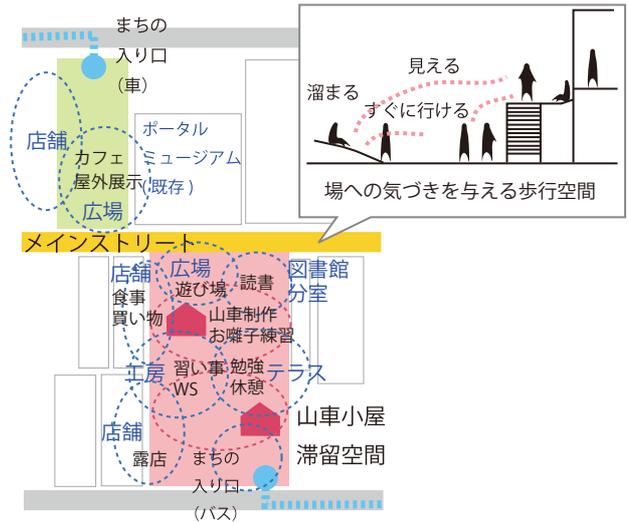


図-5 場のデザイン概要

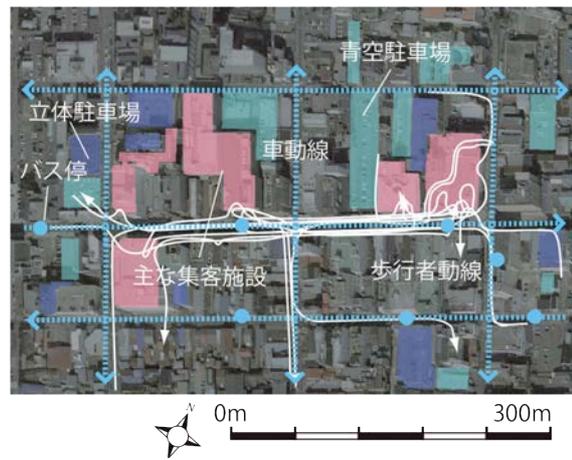


図-6a モビリティデザイン：改変前

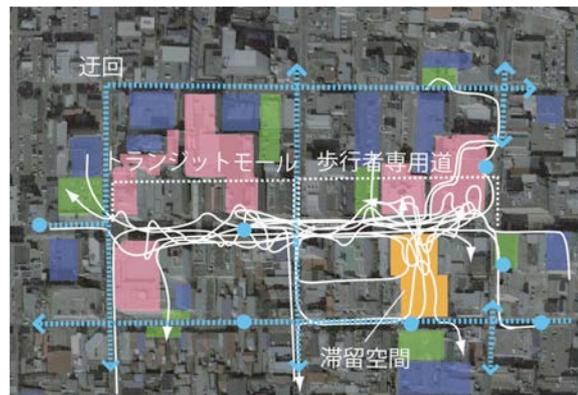


図-6b モビリティデザイン：改変後

の整理とその重なりに配慮したものである。デザインという作業の性質上、場の参加者の語りからデザインそのものが生まれる訳ではないが、イメージの共有や、設計の中核をなす風景（この場合は山車小屋とその周辺）をいかにして生み出していか、そのための移動空間のデザインを考える上で、祭り参加者の語りの利用は有効であったと言える。

7. まとめ

本研究では、八戸三社大祭の山車組における場に関する語りから、人々の集散、場への愛着や関わりの動機づけに結びつく要素を抽出し、それらを反映させた八戸市中心街における場のデザイン提案を行った。地域に根付いた場の風景を語りから捉えることで、そこで起こっていた関わりの質や人々にとっての場の意味を知り、計画へと繋げることができた。

時代の流れにより地域の空間構造が変化して行く中でも、人々によって自然に醸成されてきた関わりを現

在の空間利用と重ね合わせ、新たな場として再生させることは重要である。このような手法は、他の都市においても応用が可能であると考えられる。

謝辞：調査にあたっては、八戸市の各山車組の方々に多大な御協力をいただいた。八戸市の田名部裕雅氏をはじめ、インタビューや山車組の参加者の方の紹介などに御協力くださった8名の方々に、深く謝意を表す。

参考文献

- 1) 相澤亮太郎：阪神淡路大震災における地蔵祭祀一場所の構築と記憶一，人文地理第57巻第4号，pp.62-75，2005.
- 2) 八戸市教育委員会：八戸三社大祭文化財調査報告書，2002.
- 3) 八戸市史編纂委員会：新編八戸市史民俗編，八戸市，2010
- 4) 八戸市史編纂室：八戸市中心街の民俗，八戸市，2007.

(?)